

トマス・アクィナス『カテナ・アウレア』抄訳ー真福八端ー
 Selected Translation of 'Catena Aurea'

山口隆介

Yamaguchi Ryusuke

要 旨

Marietti 版『カテナ・アウレア』中「マタイ福音書」5章の真福八端の註釈を以下に翻訳した。Expositio in Matthaem, in: Catena Aurea in Quatuor Evangelia, I, Marietti, 1953, pp.72-76 を底本とした。「マタイ福音書」5章の註釈にあたるが、最初からではなく「靈において貧しい者は至福である」という真福八端冒頭の聖句の註釈から訳した。

Key Words : 至福 真福八端 『カテナ・アウレア』

アウグスティヌス『神の国』(19, 1): 哲学することの理由は、善という目的に他ならない。それはまた、人を至福にする。彼〔至福になった人〕が善という目的である。そしてそれゆえ、至福から始めるに当たって、「至福だ、靈において貧しい人々は」と言う。

アウグスティヌス『主の山上の説教について』(1, 2): 靈というものを強情にしておくことは、蛮勇と傲慢を意味する。民衆に対し、大きな靈魂を有していると、傲慢な人々は語られる。それも正当に。すなわち、風が靈と呼ばれる。誰が、傲慢な人々は、膨れ上がった風のように、膨れ上がった人々であると言われることを知らない。このために、ここでは、靈において貧しい人々とは、謙遜で、神を恐れる人々、すなわち、膨れ上がる靈を有しない人々と解するのが正しい。

クリソストムス『マタイ福音書註解』(説教 15): あるいは、ここでの靈とは、高揚と靈魂のことを言っている。すなわち、多くの人は望まないままに、つまり、物質的な強要という必然性によって低い地位にあり、このことに対し

て賞賛はない。そこで、〔主が〕至福とするのは、自ら選択して低い地位にへりくだる人たちである。そしてそれゆえに、ここで、傲慢を根っこから引き抜くということが始まる。これ〔傲慢〕は全般的な悪意の根と泉であったからである。これに対立させるべく、〔主は〕謙遜をおく。ある種の確固たる土台として。このこと〔謙遜〕に身をさらすことで、他のものも確固として建築される。そして、これ〔謙遜〕が壊されるなら、あなたが集めた善なるものはすべて滅ぶ。

クリソストムス『マタイ福音書について』(未完, 説教 9):また、それゆえ、明らかに、〔主は〕「至福だ、霊において謙遜な人々は」とおっしゃり、このようしかたで謙遜なものたちを示している。すなわち、〔人びとが〕常に、神の助力を乞い求める者たちであるように。そこで、ギリシア語では「至福だ、プトーコイ、乞い求める者たち、あるいは貧窮者たちは」。すなわち、多くの謙遜な人々は生まれながらにしてそうだが、信仰によってではそうあるのではない。神の助力をはねつけず、信仰に基づいて謙遜である人たちがそうだ。

クリソストムス『マタイ福音書註解』(説教 15):あるいは、ここでの霊において貧しい人々とは、神の命令を恐れ、おののく人々のことを言っている。主が、イザヤに委ねたように。何が単に謙遜である以上に大きいか。謙遜な者たちに属することは、ここでは適度であり、ここでは過度であるということである。

アウグスティヌス『主の山上の説教について』(1, 2):それゆえ、傲慢な人々は地上の国々を求めるが、謙遜な人々のものとなるのは天の国である。

クリソストムス『マタイ福音書について』(未完, 説教 9):すなわち、他の悪徳が下の者たちへと下ろすものであり、傲慢が最大度に下ろしていくように、すべての徳は天の国に引き込むものであり、謙遜が最大度に引き込むものである。自らを低くする者が讚美されるということがふさわしいことだからである。

ヒエロニムス:あるいは、至福だ、霊において貧しい者、すなわち、聖霊の

ゆえに、意志によって貧しい者たちは、

アンブロシウス『義務について』(1:16):それゆえに、至福が神的判断において始まるところで、骨折りは人間のものと見なされる。

『行間註解』:また、現世で貧しい者たちには、天の富が約束されるのが適切である。

2.

アンブロシウス『ルカ福音書註解』(1,4,「至福について」):私が貧しい者として端的に満足しているだろう時、それは私自身の性向を抑制するのに役立つ。時間的なものを欠くのに、私に役立つのは、柔和であることでなければ何か。それゆえに、「至福だ、柔和な者たちは」と言われているのは適切である。

アウグスティヌス『主の山上の説教について』(1,3):柔和な人々とは、厚かましさに譲歩し、悪に抵抗せず、善のうちで悪に勝つ人々である。

アンブロシウス『ルカ福音書註解』(前掲箇所):それゆえに、自分の感情を和らげて、怒らないようにせよ、あるいは確かに、怒って罪を犯さないようにせよ。なぜなら、運動をおもんばかりによって抑制することは優れているからである。そして、短気を禁じることは、まったく怒らないということに比べて小さい徳に属するとは言われない。前者〔短気を禁じること〕はより柔軟な、後〔まったく怒らないということ〕はより強い徳と評価される。

アウグスティヌス(前掲箇所):したがって、無情な者たちは相争い、地上的で時間的なもののために闘争する。しかし、「至福なのは、柔和な者だ。彼らは地を受け継ぐからである」。この地から彼らを引きはがすことはできず、私はあえて言うが、この地についてはこう語られている。「生きている者の地に私の取り分がある」(詩 140:6)。すなわち、永続的な相続のある種の安定性を示しているところでは、靈魂は善なる感情によってその場所に安らぐ、身体が地に安らぐように。そしてそれゆえ、自分の食糧により成長する。身体が地から成長するように。これこそ、聖人の安らぎと生である。

クリソストムス『マタイ福音書について』(未完, 説教 9):あるいは, ここでの地は, ある人々が言っているように, この状態である限り, 死者たちの地である。空虚さに従属しているからである。腐敗から解放される時, 生者たちの地になる。死者たちが不死の地を受け継ぐのに応じて, 他の講解者たちが読まれるに, [ここでの地は] あたかも天のようだ。そこに聖人たちが住むことになるという。生者たちの地と言われているのは, それより低い領域に対しては天であるが, それより高いところに対しては地と言われるからである。他の人々はこう言う。われわれの体は地であるから, そして死に対し身を横たえる限り, 地は死者のものである。しかし, [体が] キリストの栄光の体と同じ体になる時, 生者の地となる。

ヒラリウス『マタイ福音書註解』(can. 4¹):あるいは, 主は, 柔和な者たちに対し, 地の相続を保証している, すなわち, 自ら〔主〕が住みかとして取り上げたその体の。我らの精神の馴致によって, キリストは我らのうちに住む。そして, 我らは輝かしくされた自身の体の栄光を着込む。

クリソストムス『マタイ福音書註解』(説教 15):またあるいは, キリストはここで, 霊的なものに, 感性的なものを混ぜ込んでいる。柔和である者は, 自分のものをすべてなくすと評価されるので, 反対のものを約束し, 厚かましくない者が確固として所有すると言っている。しかし, 霊魂と父祖からの相続をたびたびだめにするというのは別の話である。というのは, 預言者もまたこう言っているからである。「馴致された者たちは, 地を受け継ぐだろう」(詩 36:11)。〔主は〕よく慣れた言葉で, 説教を組み立てている。

『行間註解』:自分自身をよく治めるものは, 未来における父からの相続をよく治めるだろう。治めるということは, 持つということよりも重要である。すなわち, 我らが持っている多くのものは, じきに放棄することになるものだからである。

アンブロシウス『ルカ福音書註解』(50, 4, 至福について):あなたがこのこと

をする〔地を受け継ぐ〕のは、すなわち、貧しく、そして柔和であるからなので、自分が罪びとであるということを忘れないように。そして、あなたの罪を悲しむように。それゆえ、「至福だ、悲しむ者たちは」と続く。そして、第3の至福は、罪を悲しんで泣く者のものである。三位一体は、罪を大目に見るからである。

ヒラリウス『マタイ福音書註解』(can. 4):すなわち、ここでの悲しむ者たちとは、孤児であること、虐待、損害を嘆く者たちのことではなく、昔の罪を泣く者たちを言うものである。

クリソストムス『マタイ福音書について』(未完, 説教 9):そして、自分の罪を悲しむ者たちは至福であるが、それは限定的になのだ。他人の罪を悲しむ者こそがより至福である。このような人たちは、すべて、教師である。

ヒエロニムス:すなわち、ここでの悲しみは、死者のためのものとして、自然の一般的な法によっておかれているものではなく、死者の罪と悪徳に対するものである。かくて、サムエルはサウルのことを泣き、パウロは、けがれた行いの後、悔悟の念をあらわにする者たちのために泣いた。

クリソストムス『マタイ福音書について』(未完, 説教 9):そして、なぐさめは、悲しむ者たちの、悲しみの中断であるので、自分の罪を悲しんでいる者たちはなしたことの赦免によってなぐさめを受ける。

クリソストムス『マタイ福音書註解』(説教 15):そして、たとえ、このような者たちには、ゆるしが、享受に十分であるとしても、罪のゆるしのうちに報いを終わらせることなく、現世と来世とで、多くのなぐさめに与る者とするものである。すなわち、神は労苦に対して、常により大いなる報いを与るのである。

クリソストムス『マタイ福音書について』(未完, 説教 9):また、他者の罪を悲しむ者たちは、なぐさめられるだろう。かの世では神の摂理を知り、滅んでしまったものは神のものではないということを理解するからである。すなわち、その手から〔何かを〕奪うことができる者は誰もおらず、悲しみは捨て去られるがゆえに、彼らについて、自分の至福のうちで喜ぶだろうという

ことである。あるいは、別のことがある²。

アウグスティヌス『主の山上の説教について』(1,4):悲しみとは、肉を放棄するがゆえの悲しみである。そして、神に向き直った人々は、この世で貴重なものとして持っているものを放棄する。すなわち、以前喜んでいたものを、喜ばない。それらのもののうちで永遠のものへの愛となるまで、悲嘆により傷つけられないことはない。それゆえに、彼らがなぐさめられるのは聖霊によって、それゆえに、彼〔聖霊〕は、最大度にパラクレートス、すなわちなぐさめる者と呼ばれる。時間的なものを放棄する者は、永遠の喜びを十分に享受するがゆえに。そして、それゆえ、「彼らはなぐさめられるだろうから」と〔主は〕言っているのである。

『行間註解』:あるいは、悲しみによっては、2種類の悔恨が解される。すなわち、この世の悲惨さのゆえのものと、天への欲求のゆえのものとのことである。それゆえに、カレフの娘は、より上の灌漑されたものとより下の灌漑されたものとを願ったのである。そして、このような悲しみを持つのは、貧しく、柔和な者だけであり、そのような者は世を愛さないがゆえに、みじめであるものを認知し、ゆえに天を欲する。悲しむ者たちには、なぐさめが、すなわち、現在においては悲しんでいるものが、未来には喜ぶということが約束されているのがふさわしい。そして、悲しむ者の報いは、貧しい者、および柔和な者の報いより大きい。王国で喜ぶのは、持つことや、所有し治めることより優れている。すなわち、悲痛のもとで治める時、多くのものがある。

クリソストムス『マタイ福音書註解』(説教 15):また、注目されたいのは、〔主が〕この至福を単においたというだけでなく、意識的かつ集中的においたのであり、それゆえに、「嘆く者たちは」ではなく「悲しむ者たちは」とおっしゃったのだということである。そうであるなら、全哲学のかのおきては、教導である。死せる息子たちと隣人たちとのために悲しむ人であるなら、その悲痛の時には、金への愛によってでも、栄光への愛によってでもそうあるのではなく、嫉妬に食い尽くされることも、不正なものによってかき乱されることもなく、また他の悪徳に襲われることもない。悲しみに引き渡された

者たちだからである。自分の罪を悲しむ者たちには特に当てはまる。それら〔自分の罪〕を悲しむことが尊厳あることであるように、彼ら〔悲しむ者たち〕はこの哲学をより高貴なものとして示さなければならない。

4

アンブロシウス『ルカ福音書註解』(50, 4, 至福について):わたしは過ちを悲しんだのち、義に餓え、渇き始める。すなわち、病人は重い病の際には餓えない。そこで、「至福だ、義に餓え渇く者たちは」と続くのである。

ヒエロニムス:わたしたちには義を欲することでは十分ではなく、義への餓えを感じていなければならない。この例では、わたしたちは自分を決して十分に義なるものと解さず、常に義のわざに餓えていると解されるからである。

クリソストムス『マタイ福音書について』(未完, 説教 9):人間が為すすべての善が、自分の善への愛から出たのではないのであるなら、それは神の前に報われぬことである。また、義に餓える者は、神の義によって回心することを欲する者である。また、義に渇く者は、その〔義の〕知識を得ることを欲する者である。

クリソストムス『マタイ福音書註解』(説教 15):また、〔主は〕義を語っている。一般的な義と、特殊な強欲に対立する義を。すなわち、あわれみについて語るだろう者であったがゆえに、いかにあわれまれるべきかを予示するのである。略奪のゆえにあわれまれるべきでも、強欲のゆえにあわれまれるべきでもない。そこで、強欲に特有のもの、すなわち、餓え渇くことを主は、義に帰しているのである。

ヒラリウス『マタイ福音書について』(can. 4):義に餓え渇く者に〔主は〕至福を帰するのに、神の教えへと延ばされた聖人たちの渴望が、天での完全な満足で満たされることを表している。そして、これが、「彼らは満たされるだろう」と言われていることである。

クリソストムス『マタイ福音書について』(未完, 説教 9):すなわち、報いる神の気前よさ〔神は気前よく報いて下さる〕と。神の報酬は、聖人たちの欲

求より大きいのである。

アウグスティヌス『主の山上の説教について』：あるいは、彼ら〔聖人たち〕は現世ではその食糧で満足するだろう、ということについて主はこう語っている。「わたしの糧は、わたしの父の意志をなすこと」、すなわち、正義であり、またその水については、「飲むだろう人には誰でも、永遠の命へと湧き出す水の泉があらわれる」（ヨハ 4:14）。

クリソストムス『マタイ福音書註解』（説教 15）：さらにまた、感覚的なものが報酬となるのは、最も多くの金持を作るのは強欲だと考えられるからである。〔主は〕言う。これは反対のものであり、またむしろ正義に優越すると。すなわち、正義を愛する者は、もっとも安全にすべてを治めるからである。

5

『行間註解』：正義とあわれみは一方が他方をおさえるように結びついている。正義はすなわち、あわれみなくしては残酷であり、あわれみは正義なくしては弱さである。そこで、あわれみについて、正義の後に据えられたのが「至福だ、あわれみ深い者たちは」である³。

レミギウス：あわれみ深い者と言われるのは、いわば、みじめな心を持つ者だということである。というのは、他の人のみじめさを自分のものと考え、他の人の悪を自分のものとして悲しむからである。

ヒエロニムス：ここでのあわれみは、施しのうちで解されるだけでなく、兄弟のすべての罪のうちでも解される。私たちの間で、他の人のわざを担うということであるなら。

アウグスティヌス『主の山上の説教について』（1, 6）：〔主が〕至福な者たちと言うのは、みじめな人を助ける者たちのことである。彼ら〔みじめな人々〕に報いて、みじめさから解放されるようにするからである。そこで、「彼らは、あわれみを受けるのだから」と続くのである。

ヒラリウス『マタイ福音書註解』（can. 4）：神は、すべての人たちへの私たちの善意を、情感において楽しんでおり、それだけに、自らのあわれみを、あ

われみ深い人たちだけに向けることだろう。

クリソストムス『マタイ福音書註解』(説教 15):そして、等しい報いがあり、それどころかはるかに大きい報いがあると思われる。なぜなら、人間のあわれみと神のあわれみとは等しくないからである。

『行間註解』:あわれみ深い者たちに、あわれみがもたらされ、彼ら〔あわれみ深い者たちが〕受けるに値する以上に受け取るということは正当である。そして、十分さを超えて有している人は、十分なだけ有している人より多くを受け取る。かくて、あわれみの栄光は、〔あわれみに〕先立つ栄光より大きいということになる。

6

アンブロシウス『ルカ福音書註解』(1.4, 至福について):あわれみを譲るものは、清い心であわれまないなら、あわれみを捨てることになる。すなわち、もし、自慢したいと求めるなら、実りはない。そこで、「至福だ、心の清い者たちは」と続く。

『行間註解』:6番目に心の清さがおかれているのは適切である。というのは、6日目に人間は神の像に似せてつくられたが、これ〔神の像〕は人間のうちでは、過ちによって暗くされているものの、清い心のうちで恵みによって作り直されるからである。先行して言われていることの後に〔心の清さ〕が続くのは正当である。というのは、人間のうちに清い心は創造されないからである。

クリソストムス『マタイ福音書註解』(説教 15):ここで〔主が〕清い人々と言っているのは、あるいは、徳全般を有しており、意地悪な性向〔悪徳〕をまったく覚えない人々であり、あるいは、節制を守る性格の人々である。これ〔節制〕は、パウロが次のように言っているように、神を見るのに最大度に必要なものだ。「すべての人々と平和を得ようと求めよ、それなくしては誰も神を見ないだろう聖域を」(ヘブ 12:14)。なぜなら、多くの人たちがあわれむということをしなから、みだらなことを行なうからである。これは、第 1

のこと,すなわちあわれむということでは不十分だということを示しており,清さについてこれ〔みだらなことを行うこと〕は反対するものである。

ヒエロニムス:そして,清らかな神は清らかな心で欲せられる。なぜなら,神の神殿は,汚され得ないからである。そして,これが「彼らは神を見るだろうから」と言われていることである。

クリソストムス『マタイ福音書について』(未完,説教9):なぜなら,すべての正義を実行し,思考する者は,その精神において神を見るが,それは正義が神の姿だからである。すなわち,神は正義である。それゆえに,誰かが自らを悪から引きはがし,善をなすというなら,まさにこのことによってその人は神を,あるいは不十分に,あるいはより多く,あるいは時々,あるいは常に,人間の能力にに応じて見る。また,あの世では,清い人の心で,神を,顔と顔とを合わせて見ることになるだろう。すなわち,ここでのように,鏡を通して謎において見るのではなく。

アウグスティヌス『主の山上の説教について』(1,7):また,神を外的な目によって見ようとする者たちは愚かである。〔神は〕心で見られるのであるから。他の箇所にも書かれているように。「心を謙虚にして,あの方〔神〕を聞え」(知恵1:1)。なぜなら,謙虚な心こそが清い心だからである。

アウグスティヌス『神の国』(22,29):また,霊的な身体のうちでは,その目は,今我々が有しているようにあり得ると同じく,霊的であり得るといふなら,疑いなく,彼らによつては神は見られ得ない。

アウグスティヌス『三位一体論』(1,8;13):また,この直視は,信仰への対価である。この対価〔神の直視〕に対し,信仰を通して,心は清められる。「信仰によって彼らの心を清める者」と書かれているように(使徒15:9)。また,これは特にあの文で証明される。「至福だ,心が清ければ,彼らは神を見るだろうから」。

アウグスティヌス『創世記逐語註解』(12,15):また,死すべきものとして生きるこの生で,そして身体の感覚的な目で生きる者で,神を見る者は誰もいない。しかし,この生から,徹底的に死に切ることがないなら,あるいは体

から完全に出て行くことがないなら、あるいは無知で当然であるくらい肉的な感覚から離れることがないなら、使徒が言っているように、体の内にいようと、体の外にいるようと、かの直視に昇っていくことはない。

『行間註解』:第 1 の者たちより大きな報いを、この者たち〔心の清い者たち〕が有するというのは、王の宮廷で食事するだけでなく、王の顔までも見る者のようにである。

7

アンブロシウス『ルカ福音書註解』(1.4, 至福について):罪の汚れすべてから離れて、あなたは自分の内なるものを空しくし、不一致と闘争が、あなたの情動から起きないようにするので、あなたから平和を始め、かくてあなたが平和を他の人々にもたらすようにせよ。そこで、「至福だ、平和を作る者たちは」と続く。

アウグスティヌス『神の国』(19, 13):また、平和は秩序の平安である。秩序は、等しいものと等しくないものに関し、各自の場所を各自に帰する配置である。また、喜ぶことを欲しない者が誰もいないように、平和を持つことを欲しない者は誰もいない。戦いを欲する者たちが切望するのは、栄光ある平和に、戦うことで到達しようとすることに他ならない。

ヒエロニムス:また、平和を作る者たちは至福だと言われるが、この者たちは、まず自分の心のうちで、次いで一致のない兄弟の間で、平和を作る。すなわち、何が、あなたを通して他の人々を平和にするのに役立つか、あなたの靈魂に悪徳の争いがあるのだから。

アウグスティヌス『主の山上の説教について』(1, 8):また、自分たちのうちに平和を作る者は、自分の靈魂の運動をすべて理性に合致させ、従属させる、そして肉的な欲望を〔理性により〕征服されたものとする者たちである。神の国が〔平和を作る者たちに〕生じる。そのうちではすべてが、人間のうちに卓越した最優先のものが、われわれにも至福者にも共通している抵抗を制し、支配するという秩序に整えられている。そして、人間のうちに卓越して

いるまさにそのもの、すなわち精神あるいは理性は、より力あるもの、すなわち真理に従属している。すなわち、神の子に。なぜなら、上位者に従属することなしには、下位者に命ずることはできないからである。そして、これは、地においては善意の人に与えられる平和である。

アウグスティヌス『回想』(1, 19):一方、この世の生では誰に対しても、精神の法に反する方が肢体のうちにまったくないという事態は起こり得ない。しかし、このことを今、平和を作る者たちは、肉の欲を支配することなし、もっとも豊かな平和にいつでも来たらしめられる。

クリソストムス『マタイ福音書について』(未完, 説教 9):他の人々のために平和を作る者たちは、平和のうちに敵を和解させるだけでなく、悪を忘れ、平和を愛する人々である。すなわち、かの至福なる平和とは、心のうちにできあがるものであって、単に言葉のうちだけのものではない。そして、平和を愛する者は、平和の子である。

ヒラリウス『マタイ福音書註解』(can. 4):そして、平和を作る者たちの至福は、養子とされるに値する。そして、それゆえ、「神の子と呼ばれるだろうから」と言われる。すなわち、すべてのものを等しく調和させる方こそ、我らの神だからである。我々が愛徳による兄弟的平和のうちに生きるという以外の仕方では、彼〔神〕の家族であるという宣言によって家族の一員となることを、〔神は〕許さないだろう。

クリソストムス『マタイ福音書註解』(説教 15):あるいは、平和を作る人たちは、互いに争うことなく、一致のない他者を一致のうちに呼び戻す人々のことを言うので、〔彼らは〕また正当にも神の子と呼ばれる。この卓越したわざは〔神の〕独り子のものだからである。距離があるものを結びつけ、不一致があるものを結びつける。

アウグスティヌス『主の山上の説教について』(1, 8):あるいは、平和のうちに完璧さがあり、そこでは何ものも争うことがないのであるから、平和を作る者たちは、神の子と呼ばれる。特に、神の子たちは、父への類似性を有していなければならない。

『行間註解』:それゆえに、平和を作る者たちは、最大の尊厳を有している。王の子と言われる人は、王宮で最高のものである。そして、7番目の場所に、この至福がおかれるのは、真の安らぎの安息日には、平和があり、そして世代を貫いてそうなるだろうからである。

8

クリソストムス『マタイ福音書註解』(説教 15):平和を作る者の至福がおかれた後、自分のために平和を求めることが善であると見積もられないように、「至福だ、義のために迫害を受ける者たちは」と続けている。これは、徳のゆえに、他者を守るために、敬虔さのために、ということである。というのは、正義を靈魂のすべての徳に代わっておく習わしだからである⁴。

アウグスティヌス『主の山上の説教について』(1, 8):平和は内的に作られ、固められるが、外に派遣された人は、どのような迫害をも、外的に引き起こし、処理して、神に基づくべき栄光を増す。

ヒエロニムス:「義のゆえに」と〔主が〕はっきり付け足して言っているのは、多くの方は自分の罪のゆえに、迫害を受け、義ではないからである。また同時に、8番目の、真の割礼の至福は、殉教を極限のものとしている。

クリソストムス『マタイ福音書について』(未完, 説教 9):そして、〔主は〕「諸民族によって、迫害を受ける至福な人々は」とおっしゃったわけではなく、あなたは、偶像を崇拝しないがゆえに迫害を受ける人だけが至福と考えるべきではないのであるから、それゆえ、真理を捨て置かないがゆえに異端者たちからの迫害を受ける人もまた至福である。義のために苦しんでいるからである。しかし、たとえ、キリスト教徒と思われる力ある人たちのうちの誰かが、公然と当人の罪のゆえにあなたに正されて、あなたを迫害したとしても、あなたは洗礼者ヨハネと同じく至福である。なぜなら、預言者が、殉教者である、自分の人々に殺された者ということが真であるなら、疑いもなく、神に属する原因のゆえに何らかの苦しみを受けている人である。たとえ、自分の人々によって苦しめられたとしても殉教の代価を有している。そして

それゆえに、聖書は迫害者の人格を書かず、迫害の原因だけを書く。すなわち、誰があなたを迫害するのかではなく、何のゆえにかに着目するように。

ヒラリウス『マタイ福音書註解』(can. 4):それゆえに、正義であるキリストのためにあらゆることを受けることが下位の情感である人々を、〔主は〕至福のうちで最後に数える。それゆえに、この人々、すなわち、世をあなたなどのうちに、霊において貧しくある人々によって、王国すら維持される。そこで、「天の国はその人たちのものだからである」と〔主は〕言っている。

アウグスティヌス『主の山上の説教について』(1, 9):あるいは、8番目の至福は、あたかも、頭となっているかのようだ。というのは、使い尽くされたものも、完成されたものも示し、かつ証ししているからである。かくて、第1と第8に数え入れられているには、天の国である。なぜなら、完成させるものは7つある。すなわち、8番目のものは、輝かしくするものであり、かつ完全なものを示す。これらの段階を通して完全性、その他の点で昇っていくように、あたかも、さらに始まりが受け取られるように。

アンブロシウス『ルカ福音書註解』(1. 4, 至福について):あるいは別のこともある。最初に、天の国が聖人たちに、身体からの離脱という形で提示されている。第2に、復活の後にキリストとともにあることが示される。すなわち、復活の後にあなたは、地をあなたのものでありして所有することを、死から離れている者として始めるだろう。そして、所有そのものうちであなたはなぐさめを受けるだろう。なぐさめには喜びが続く。喜びには、神のあわれみが続く。そして、このような人を主はあわれむ。そして、〔主はその人を〕呼び、かくて呼ばれている者は呼んでいる者を見るのである。また、見る人は、神的な生み出しの法に取り込まれ、そしてこの時になってやっと、神の子として、天の国の富を喜ぶということになる。それゆえ、かの者は開始し、ここで満たされるのである。

クリソストムス『マタイ福音書』(説教 15):また、一つひとつの至福によって王国をあなたが耳にしないなら、あなたは決してあわれむ者ではない。なぜなら、〔主が〕「なぐさめを受けるだろう」「あわれみを受けるだろう」、そ

の他とおっしゃる時、このもの全体が、他ならぬ天の国にひそかに入り込んでいる。あなたが感性的なものを何も期待していないだろうような形で。すなわち、現在の生とともに去っていくものに取り囲まれている人は至福ではない。

アウグスティヌス『主の山上の説教について』(1,9):また、これら諸命題の数が細心に注目されるべきである。なぜなら、7つの段階で、聖霊のはたらきが一致するイザヤが描写している7つの形での聖霊のはたらきがふさわしくなくなっていくが、彼〔イザヤ〕は最高のものから、ここでは〔マタイ福音書では〕最低のものからである。というのは、かしこ〔イザヤ書〕で、神の子はもっとも低いところへ降りてくるだろうことが教えられ、ここ〔マタイ福音書〕で、人間がもっとも低いところから、神への類似に上昇するだろうことが教えられる。ここ〔マタイ福音書〕では、第1のものはおそれであり、謙遜な人間にはふさわしいものだ。この人たちについては「至福だ、霊において貧しい人々は」、すなわち、高い者を知らず、恐れている者は、と言われる。第2のものは敬虔さであり、柔和な人にふさわしい。すなわち、彼は敬虔に求め、名誉を帰し、反駁することも、抵抗することもない。このことが柔和になることである。第3のものは知識である。これは、悲しむ者たちにふさわしい。この人たち〔悲しむ者たち〕は、彼らが今、どのような悪によって縛られているか、すなわち、人々がいわば善として願う悪によって縛られているということを教えてきた。第4のもの、すなわち、勇氣は、餓え渇く者たちにふさわしい。真なる善について喜びを求める人々は労苦し、地上的なものから何かを得ようと欲望する者たちは吝嗇〔強欲〕である。第5のものは、おもんばかりであり、あわれみ深い人にふさわしい。というのは、これほどの悪から引き抜くには、すなわち、他の人々から取り去り、他の人々に与えるという唯一の治療薬があるのみである。第6のものは知性であり、心が清らかな人々にふさわしい。かれらは、目が見ないことを浄化された目で見ることができる。第7のものは知恵であり、平和を作る者たちにふさわしい。この人たちのうちには反逆的な運動は存在せず、彼らは霊に従う。ま

た、報酬の1つ、すなわち天の王国は、真に名指されているものである。最初のところに、そうしなければならなかったように、天の国はおかれている。これは、完全な知恵の始まりである。たとえば、「主へのおそれは知恵の始め」と言われているとしても(詩 110:10)。柔和な人々に対し遺産がある、あたかも、父の契約が、敬虔さを持って問い求めるものたちにあるように。悲しむ人々に対しなぐさめがある、あたかも、何を放棄し、何のうちに沈んでいるか知っている人に対してそうであるように。餓える人々には満足がある、あたかも、救いに向けて労苦する者たちに回復があるように。あわれみ深い人々にはあわれみがある、あたかも、彼らが差し出すものが彼らに差し出されるよう最高のおもんばかりを行使する者に対してあるように。心の清い人々には神を見る機会がある、あたかも、永遠のものを知るために目を清くする人々に対するように。平和を作る人々には、神への類似性がある。そして、これは、この世の生で成し遂げられ得る。使徒たちの間では成し遂げられたと我々が信じているように。すなわち、この世の生の後に約束されているものは、どのような言葉でも講解され得ない⁵。

1 当該書を未読のためこの略号が正確には何を意味するかをつまびらかにしない。まことに恥ずかしくはあるが、同書に関しては、以下も含め原語をそのまま記載することとする。

2 このようにトマスは引用と引用がつながり、一つの文章となるよう本書を執筆している。

3 霊において貧しい者の至福から平和を作る者の至福までの7つの至福について述べる箇所の注釈で1つの至福から他の至福に議論を移す時、他の箇所ではアンブロシウスの『ルカ福音書註解』に依拠しているが、この個所のみ『行間註解』Glossaに依拠している(真福八端全体として見た場合、他には義のために迫害される者の至福だけがクリソストムスの『マタイ福音書註解』に依拠して議論を移している)。ほぼ同じ内容の文言をトマスは『マタイ福音書註解』でも述べていることを考え合わせても、正義とあわれみが補い合う関係を強調する『行間註解』での議論を重視していたことがわかる。

4 8節の最後のアウグスティヌスの引用にあるように、トマスは、真福八端のうち、霊において貧しい者の至福から平和を作る者に至るまでの至福を、神にだんだんと近づいていき至福を完成させる順序に並んでいると考える。そして最後の義のために迫害される者の至福は、平和を作るということが自分のためではなく、この世の幸せのためでもなくなされるものであり、そう

することで、この世を超えたところにおいて至福が実現されることを語るものであるとされる。

⁵ この世の生ののちに約束されているものは、どのような言葉でも講解されえないという語句で至福に関する議論が締めくくられているのは、未完に終わった『神学提要』 *Compendium Theologiae* の執筆された最後の箇所の論議が、人間がかの国、すなわち天国に到達できるということを論じるもので「このことが可能であることは、明らかな実例によって示される」と書かれ、その実例が挙げられないまま途絶していることを考えると誠に示唆的である。『神学提要』はトマスの死によって途絶したとの説もあるが、そうだとするとよく知られた、トマスの死の直前の執筆放棄による途絶ということになる。この執筆放棄は、ある啓示を受けたトマスが「今度啓示されたことに比べると今まで書いてきたことは藁くずのように思え」たためと伝えられているが、そのことを考え合わせると一層示唆的であるように思われる。